



並んだほだ木に豊富にはえるしいたけ

## 平成18年特用林産物生産動向から見た 国産ブランドの転換期

平成18年特用林産物生産動向が公表されました。  
内容から、しいたけをはじめ、国産ブランドへの評価が高まってきており  
特用林産物の生産は  
今、転換期にあることがわかりました。



新たな用途への利用が期待される木炭（写真は、インテリア・消臭用）

平成 18 年のおもな特用林産物の生産動向

区 分		生産量 (トン)	対前年 増減率 (%)	生産額 (億円)	対前年 増減率 (%)	主要生産 都道府県
食 用	きのこ類					
	乾しいたけ	3861	- 5.5	144	- 2.7	大分、宮崎、岩手、愛媛、熊本
	生しいたけ	66349	1.8	735	6.8	徳島、群馬、栃木、岩手、北海道
	えのきたけ	114630	0.1	362	18.4	長野、新潟、福岡、北海道、大分
その他食用	たけのこ	26900	15.9	62	9.7	福岡、鹿児島、熊本、徳島、静岡
非 食 用	木炭	31321	- 6.6	40	2.1	岩手、北海道、岐阜、島根、福島
	竹炭	1350	- 8.9	11	- 27.1	福岡、熊本、鹿児島、山口、静岡

木炭の生産量には、白炭、黒炭、粉炭が含まれます

## 農山村の産業を支える 特用林産物

特用林産物とは、食用のきのこ類をはじめ、木の実類や山菜類、また、非食用の木炭や竹炭、うるしなど、山や森林原野を起源とする生産物の中で、一般の木材を除いたもの総称です。現在は平地で栽培されていても、もともとは山や森林原野で採

れていたえのきたけやぶなしめじなども特用林産物です。

特用林産物の生産は、農山村の資源を活用した産業の一つで、地域経済の安定や就労の場の確保に大きな役割を果たしています。

## 国産ブランドとしての 価値を上げる絶好の時期

平成十八年の特用林産物生産動向

の大きな特徴は、生しいたけの生産額にあります。生産量はほぼ横ばいなのに対して、生産額は六・八%アップしました(表)。これは中国からの輸入量が、中国国内の需要拡大やポジティブリスト制度の導入などにより、前年に比べて二七・二%減少したため、国産品の単価上昇が要因として挙げられるでしょう。

また木炭は、近年のバーベキュー

や炭火焼の人氣に加えて、水質浄化や消臭、調湿など一般消費者の利用も増えてきていますが、平成十八年の生産量は前年比六・六%減となっており、今後もさらなる需要拡大に向けた取組が必要です。

このほか、たけのこは、今まで安価な輸入品の増加により生産量が減少傾向にありましたが、平成十八年は十五・九%増加と、若干の回復が見られました。たけのこ生産量の増産を図るため、荒廃している竹林の手入れを行い、発生環境を整えることが重要になっています。

これまで、生産者の高齢化や輸入量の増加により、特用林産物の生産量は、ほとんどの品目において減少していました。しかし、平成十八年の総生産額は二九五九億円と、前年に比べて六・四%アップしました。特用林産物は、農山村地域の貴重な収入源です。クオリティの高い安全な国産ブランドを広く紹介すれば、生しいたけの例のように、一つひとつの価値が高まって価格の上昇につながるのです。これから今、国産ブランドの価値を上げ、農山村を活性化させる絶好の時期だといえるでしょう。